令和元年９月７日移動教育委員会・意見交換要旨

（鈴木委員）来年度から、小学校低学年で外国語活動、高学年で教科として英語が実施。保護者として、小学校での外国語活動、英語に何を求めたいか。

（参加者）小学校での外国語活動、英語については、中学校の英語とのつながりを意識して実施してほしい。

（参加者）小学校からネイティブの生の英語を聞く・話す機会を作ってほしい。

（参加者）教科書の文法を教えるだけでなく、英会話教室のような、ネイティブの外国人を招いて日常会話を教える機会を作ってほしい。

（指導課長）来年度から、小学校３・４年で外国語活動、５・６年で教科として英語が実施される。現在、本市では移行期間として、３・４年生で外国語活動を週１時間、５・６年生で英語を週２時間実施し、ＡＬＴと呼ばれるネイティブの生の英語に触れる機会については、３・４年生は年間 35 時間のうち 12 時間ほど、５・６年生は 70 時間の内 23・24 時間ほど設けている。

各学年において、３・４年生では外国語活動に慣れ親しむこと、５・６年生については、中学への接続を意識し、簡単な英語を書くこと、読むことも学習内容に入ってくる。

（渥美委員）道徳が教科となり、自分で考え、クラス皆で学び合う授業が求められている。自分の及び他人を大切にする心を育てるため、保護者としてどのような指導をしてほしいか。家庭では、子供とのかかわりで心掛けていることは何か。

（参加者）外部講師などから壁にぶつかった時に乗り越える力を養える指導をしてほしい。

（参加者）道徳は答えのない授業のように思うので、それを教科化し評価することに違和感がある。

（渥美委員）自分らしい生き方を実現する手立てとして、キャリア教育を推進している。これからの社会を生き抜くため、保護者として求めたい資質・能力は何か。または、子供に足りないものは何か。

（参加者）子供の時から、生活するために働いてお金を稼ぐことが必要であることを教育してほしい。

（参加者）子供たちに、親のすがた・親の背中などをみせることで、親に対する感謝の気持ち、親を認める気持ちを育成してほしい。

（安田委員）増加傾向の不登校の子供に対し、校内外の適応指導教室で支援している。不登校にならないよう、家庭で心掛けていることは何か。教育委員会や学校にどのような取り組みをしてもらいたいか。

（参加者）簡単で良いので学校から一言連絡がほしい。一言がないとモヤモヤした気持ちが増幅してしまう。また、自分の身近なところで、不登校になった子供の話を耳にする。学校ではスクールカウンセラー等の様々な人が相談に応じ、相談しやすい先生もいる一方でそうでない先生もいる。子供が不登校にならないよう、様々な取り組みを行ってほしい。

（参加者）不登校になった子供に対しても、個別に授業を行うなどの配慮をしてほしい。

（黒柳委員）各学校の利用実態を踏まえて、ＳＮＳにおける教員と保護者との個人的なやり取りの指針作成を予定している。皆さんがご存知の実態や指針でどのような規制が必要かご意見をいただきたい。

（参加者）部活動における連絡方法は、ラインやメール等の様々な方法で行われている。先生と保護者のやりとりはあるが、先生と生徒が一対一でやりとりをしている実態はないと思う。

（参加者）先生と保護者会の代表との 7 間で、電話やメール等でやりとりをしていた。指針を作成しても、その中で最も適切な手段で連絡が行われると思うので、作成をしても問題は無いと思う。

（田中委員）学校における「働き方改革」で感じていることや、今後求めたい内容は何か。

（参加者）昨年度、自分の娘が所属する小学校の吹奏楽部において、コンクールへの参加を急に取りやめる旨の連絡があった。調整の結果、参加取りやめについては翌年度以降に見送られたが、働き方改革を急に進めるのではなく、地域の協力を得ながら、ある程度の移行期間を設定し、計画的推し進めてほしい。

（参加者）部活動の縮小について、少子化や働き働き方改革の影響であることは理解できるが、子供達の将来のためにも、地域の協力を得ながら出来る限り維持してほしい。

（指導課長）部活動については、平成 30 年３月、国（スポーツ庁）が、部活動の環境を適正に整備し、部活動のやりすぎが原因で子供達の将来の芽を摘んでしまうことや故障のリスクが高まることを防ぐため、「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を作成した。このガイドラインは、教員の働き方改革の推進が第一の目的ではなく、部活動の環境を適正に整備することを目的に作成したもので、本市においても、「浜松市立部活動運営方針」を平成 30 年４月に作成した。

実際、中学校の部活動については、本年度の４月から自主選択制となり、９月からは活動時間を制限し休養日を設けるなどの見直しを行うなど、１年以上の準備期間を設けて各学校での見直しを行ってきた。今後においても、部活道のあり方がこれまでと変わっていくと思われるが、子供達がスポーツや文化的な活動に親しむことが出来るよう見守っていきたい。

ただし、本市の地域性として、もっと部活動をやりたい生徒、やらせたい保護者、部活動指導に熱心な教員がいることも事実である。従って、そのような生徒等の思いを受け止め、受け皿となるものを作るため、本年度の４月から「中学校地域活動クラブ」の立ち上げを後押している。登録した「中学校地域活動クラブ」は、中学校のグランド等を優先的に使用できるようにし、現在、40 程度の団体が登録済・申請中の状況である。将来的には、部活動と「中学校地域活動クラブ」がバランスよく存在する中で、子供達のスポーツや文化的な活動に親しむ場を支えていきたい。

（鈴木委員）コミュニティ・スクール推進モデル校の保護者の方に質問する。モデル校での活動に関し、保護者として感じていることを教えてほしい。

（参加者）浜松まつりに参加する町の保護者が講師となり、浜松まつりの由来や凧あげのやり方を通じて、地元の歴史に関する知識や地元愛や地元とのつながりの育成を図っている。授業の枠の中で実施しているため、すべてを伝えることは難しく、当日のまつりの中で伝えている。我々の思いと学校の思いに若干のズレがあるのも事実であるが、地元に住んでいる我々が、子供達の地元に対する愛着心を育てることは必要なことと思う。

（参加者）地域の幼稚園・小学校や宿泊施設に宿泊し、子供たちと地域住民がふれあう活動や、地元の方のご厚意により鮎のつかみ取り体験の活動を実施している。小規模校ゆえに可能な活動である面もあるが、10 年以上続く毎年の恒例行事として地域に定着して嬉しく思う。

（参加者）アクトシティ浜松のホールで合唱発表会を開催する際、地域の方にボランティアとして会場準備等の参加を呼び掛けた。参加されたボランティアの方から、「子供達の合

唱発表会を聴く機会となってよかった」という意見を伺うことで、学校と地域の方の双方にとってメリットのある良い取り組みだと思った。

（指導課長）プログラミング教育がどのような目的で行われるか説明する。プログラミング教育という言葉が大きく取り上げられているが、プログラマーの育成が目的ではない。コンピューターに指示を出し意図する処理を行わせる体験を通じ、どんな職業においても必要な論理的な思考力の育成を目的としている。大きなゴールに向かうためには、ひとつひとつの作業をできるだけ簡潔に、要領よく積み上げてくことが必要となることから、そのような思考力を養うのがプログラミング教育である。指導要領の中では、小学校の５年生の算数の図形の中でコンピューターに図形を描かせる体験や６年生の理科で器具を組み合わせてＬＥＤライトを発光させる体験を通じてプログラミング教育を行うことが示されており、本市においても取り組む予定である。これまでの授業を削って、プログラミング教育を新たに行うものではない。

最後に、道徳について説明する。道徳については、物事の答えはひとつだけではないことから、多様な価値観を踏まえ、多面的・多角的に考え・議論することの重要性を教育している。従って、国語や算数のように評価についても数値ではなく、文章で考え方の推移等を評価している。

（教育総合支援担当課長）発達障害の子供などへの接し方について説明する。発達障害の種類には、ＬＤ、ＡＤＨＤ、アスペルガー、自閉症など、様々な種類がある。従って、障害の状態や程度に応じ、個別に丁寧に指導を行っている。